

【研究論文】

地神塔と三神塔

高橋 晋一

一 はじめに

徳島県内のどこのムラに行っても、心石が五角柱をなし、その各面に農業を守護する五つの神（天照大神、大己貴命、少彦名命、倉稻魂命、埴安媛命）の名を刻んだ地神塔（徳島では親しみを込めて「地神さん」と呼ばれる）の姿を見ることが出来る。飯田義賢は、県内の地神塔の数は約二〇〇〇基に上るのではないかと推定している〔飯田 一九六五 二一〕。このように県内にあまねく、均質化された形態の地神塔が分布しているのは、徳島県内の地神塔造立が藩の主導で進められたためと考えられている。徳島の地神塔は、寛政元年（一七八九）、富田八幡宮（現・徳島市伊賀町一丁目の八幡神社）祀官・早雲古宝が時の藩主蜂須賀治昭に意見を申し入れ、以後各村浦に地神塔を立てて祀らせるようになったのが始まりと言われている〔金沢 一九七四 二二六〕。

筆者は県内各地の地神塔の調査を進めていく中で、地神塔の形態や祭祀のあり方に地域を越えた共通性が多く見られる一方で、かなりの程度の地域差も存在することに気が付いた。こうした地神塔の地域的バリエーションに注意しながら、徳島市を中心とした吉野川下流域の地神塔を調査し

ていた際、いくつかの神社で「大山祇命」（山の神）、「句々連馳命」（木の神）、「罔象女命」（水の神）の三つの神名と、「瓊」（玉）、「鏡」、「劍」の三つの文字（三種の神器＝三種宝物の名前）を刻んだ珍しい石塔（いしとう）が地神塔の脇に立っているのを「発見」した（図1、表1）。

これまでこの三つの神の名を刻んだ石塔に関する論考はなく、その名称もないので、ここでは仮に「三神塔」と名付けておくことにする。いったい、三神塔は何のために立てられたのだろうか。また、三神塔が地神塔に隣接して立てられているのはなぜなのだろうか。本稿では、三神塔と地神塔の形態・銘文を仔細に検討する中から、この問題に答えてみたいと考えている。

二 地神塔に隣接する三神塔の事例

ここでは、現在までに筆者が調査によって確認した七基の「三神塔」の形態・銘文を、隣接する地神塔の状況とあわせて記述する。

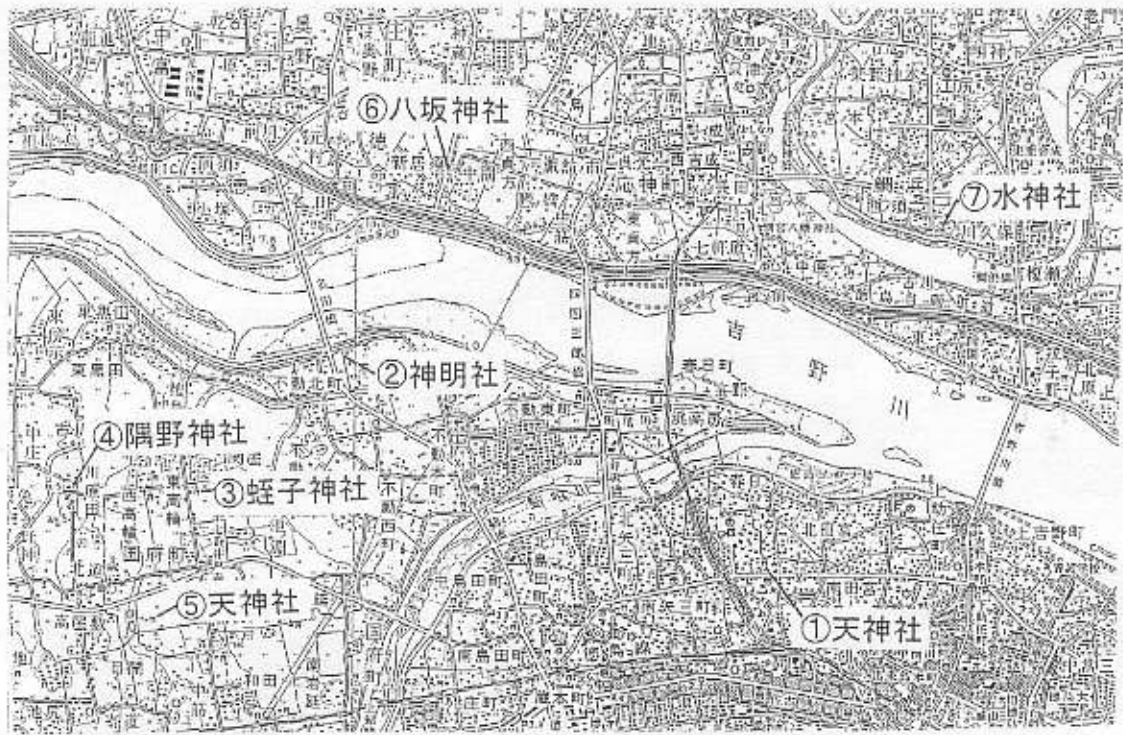


図1 三神塔の分布

(国土地理院発行5万分の1地形図「徳島」「川島」を基に作成)

表1 三神塔一覧

事例番号	神社名	所在地	造立年(元号)	造立年(西暦)	材質	形態
1	天神社	徳島市北田宮四丁目	寛政8年	1796年	砂岩	角柱
2	神明社	徳島市不動北町	寛政12年	1800年	緑色片岩	石碑
3	蛭子神社	徳島市国府町花園	享和元年	1801年	砂岩	駒形
4	隅野神社	徳島市国府町川原田	天保14年	1843年	砂岩	角柱
5	天神社	徳島市国府町日開	天保9年	1838年	砂岩	角柱
6	八坂神社	徳島市志神町西貞方	寛政10年	1798年	砂岩	角柱
7	水神社	坂野郡北島町鯛の浜	不明	不明	砂岩→花崗岩	五角柱→石碑

〔事例1〕天神社(徳島市北田宮四丁目)

◎天神社の概略

祭神は菅原道真公。旧郷社。延喜元年(九〇一)鎮座と伝える。寛保三年(一七四三)の『阿波国神社御改帳』に「田宮村天満自在天神 社僧田宮村天神坊」とある。旧藩主崇敬神社であった。また藩公代々初宮詣の儀が執り行われ、社殿の造営などにも明治三六年まで寄進があった〔徳島県神社庁教化委員会 一九八一 四〇〕。

◎地神塔

天神社境内東側の大きな松の木の下に位置する。心石は砂岩製、五角柱型。砂岩製の方形台石の上に立つ。銘文は以下の通り(時計回り→右回りに見た場合の配置。「天照太神」が北面するようにならされている)。紀年銘は入っていない。

壇安姫命
倉稻魂命
天照太神
大己貴命
少彦名命

◎三神塔

天神社境内西側のコンクリート製の台座の上

に、明治期の石碑（記念碑）二基とともに並び立つ。心石は砂岩製、角柱型で、コンクリート製の方形台石の上に立っている。三神塔は社地整備にともない現在地に移されたようで、以前は地神塔に隣接して立てられていたとも考えられる。銘文は以下の通り。

（正面）

鏡 句々迺馳命

瓊 大山祇神

劔 罔象女命

（右面）

□□寛政八辰年

春三月吉日

（左面）

有官命而

村中造立焉

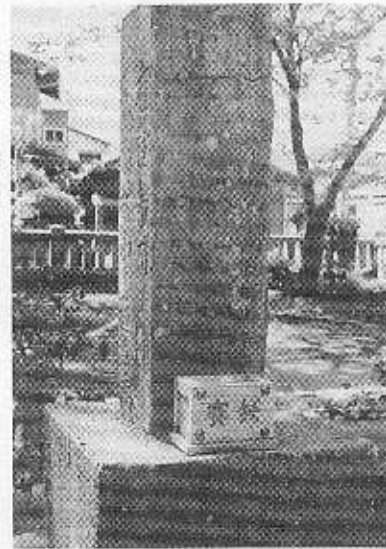


写真1 天神社境内の三神塔

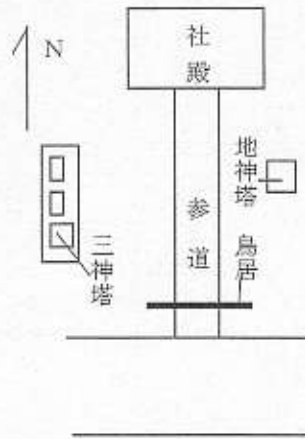


図2 天神社境内概略図

〔事例二〕神明社（徳島市不動北町なかの）

◎神明社の概略

祭神は天照大神・豊受大神。旧村社。創立年代は不詳。もと大神宮と称し、明治三年（一八七〇）に神明社と改称した〔徳島県神社庁教化委員会一九八一・七〇〕。

◎地神塔

神明社境内の南側に三神塔と並んで立てられている。三神塔と共通のコンクリート製の二段の台座（二段）を持つ。心石は砂岩製、五角柱型。台石（五角形）は砂岩製だが、欠損部分をコンクリートで補修している。銘文は以下の通り（時計回り→右回りに見た場合の配置。「天照大神」が北面するように立てられている）。紀年銘は入っていない。

埴安媛命

倉稻魂命

天照大神

大己貴命

少彦名命

◎三神塔

緑色片岩（阿波青石の自然石）製の石碑。コンクリート製・方形の台石の上に立つ。地神塔のすぐ東側に隣接して立てられている。銘文は以下の通り。

（正面）

鏡 句々迺馳命

瓊 大山祇命

劔 水象女命

(裏面)

寛政十二年庚申
秋九月七日建之

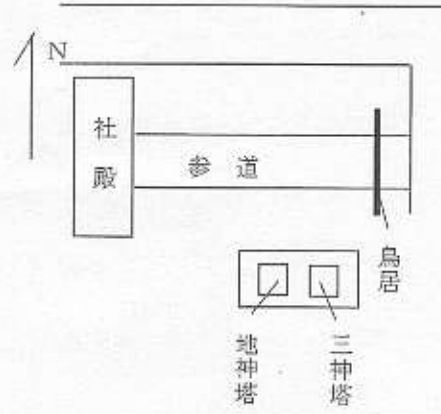


図3 神明社境内概略図

〔事例三〕蛭子神社（徳島市国府町花園字蛭子の東）

◎蛭子神社の概略

八幡神社（徳島市国府町井戸座北屋敷、旧郷社）の飛地境内社〔徳島県神社庁教化委員会 一九八一 七四〕。旧無格社。

◎地神塔

蛭子神社境内の西側に三神塔と並んで立つ。三神塔と共通する積み石の台座の上に立っている。心石は砂岩製、五角柱型。台石は五角形猫足（上

段）・方形（下段）の二段からなる。銘文は以下の通り（時計回り⇒右回りに見た場合の配置。「天照太神」が北面するように立てられている）。紀年銘は入っていない。

- 殖安媛命
- 倉稻魂命
- 天照太神
- 大己貴命
- 少彦名命

◎三神塔

砂岩製、駒型。地神塔の東側に北向きに並んで立つ。砂岩製の方形台石の上に立っている。銘文の筆致は地神塔のそれとよく似ており、両者はほぼ同時期に立てられた可能性が高い。銘文は以下の通り。

- 鏡 句々迺馳命
- 瓊 大山祇命
- 劔 水象女命
- (右面)
- 享和元年酉年
- 九月七日
- (左面)
- 花園村
- 氏子中



写真2 蛭子神社境内の三神塔（左）、地神塔（右）

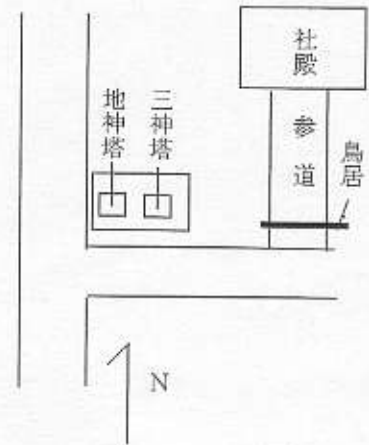


図4 蛭子神社境内概略図

〔事例四〕隅野神社（徳島市国府町川原田字居屋敷）

◎隅野神社の概略

祭神は水波能女命。旧村社。明暦三年（一六五七）再建の棟札が残されていることから、創建はそれ以前であることがわかる。明治五年（一八七二）に村社となる。寛保三年の『阿波国神社御改帳』に「川原田隅野大権現、社僧川原田村良音寺」とある〔徳島県神社庁教化委員会 一九八一—七三〕。

◎地神塔

境内東側の石組みの台座の上に、三神塔、および笠付きの石祠（砂岩製、銘文なし）と並んで立てられている。心石は砂岩製、五角柱型。台石は五角形（上段）、方形（下段）の二段からなる。銘文は以下の通り（時計回り→右回りに見た場合の配置。「天照大神」が北面するように立てられている）。紀年銘が入っていない。

埴安媛命
倉稲魂命
天照大神
大己貴命
少彦名命

◎三神塔

砂岩製、角柱型。台石は方形猫足（上段）、方形（下段）の二段からなる。北向き。地神塔のすぐ左側（西側）に隣接して立つ。銘文は以下の通り。

（正面）

鏡 句々酒馳命

瓊 大山祇命

劔 罔象命

（右面）

天保十四癸卯歳

九月吉祥日

（左面）

氏子中

（裏面）

世話人

辻蔵



写真3 隅野神社境内の地神塔（左）、三神塔（右）

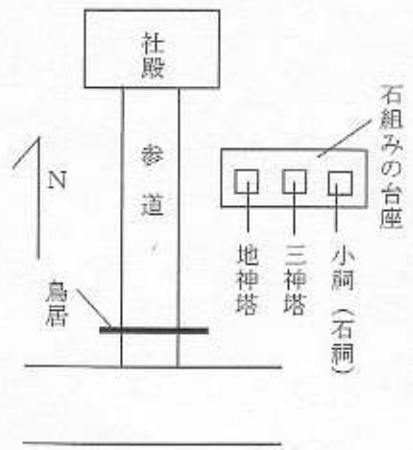


図5 隅野神社境内概略図

【事例五】天神社（徳島市国府町日開字東）

◎天神社の概略

祭神は菅原道真公。旧村社。創建年代は不詳。明治五年（一八七二）に村社となる。寛保三年の『阿波国神社御改帳』に、「日開村天満大自在天神 社僧日開村法光寺」とある「徳島県神社庁教化委員会 一九八一 七五」。

◎地神塔

境内南東隅に三神塔と隣接して立つ。地神塔と三神塔の周囲は（両者が一對の石造物と意識されているかのよう）共通のブロック製の石垣で囲まれている。

心石は砂岩製、五角柱型。台石は自然石で、高さ約一メートルの石組みの台座がある。銘文は以下の通り（時計回り→右回りに見た場合の配置。「天照皇太神」が北面するように立てられている）。紀年銘は入っていない。

- い。
- 壇安媛命
- 倉稻魂命
- 天照皇太神
- 大己貴命
- 少彦名命

◎三神塔

境内南東隅に地神塔に隣接し、北向きに立つ。心石は砂岩製、角柱型。台石は砂岩製、方形。高さ約一メートルの石組みの台座がある。銘文は以下の通り。

なお石塔左手に刻まれた銘文中の「三種寶」とは、瓊（玉）、鏡、劍の三種の神器（『日本書紀』に言う「三種寶物」）を指しているものと考えられる。

（正面）

- 鏡 句々迺馳命
- 瓊 大山祇命
- 劍 水象女命

（右手）

- 天保九年戊戌秋
- 九月七日造営焉

（左手）
為三種寶持者村中安全也

□□□ 謹書



写真4 天神社境内の三神塔

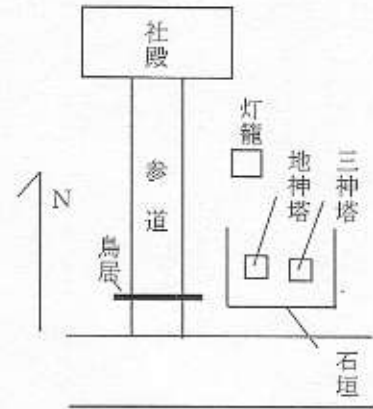


図6 天神社境内概略図

〔事例六〕八坂神社（徳島市応神町西貞方字中園）

◎八坂神社の概略

祭神は素盞鳴命。旧無格社。創建年代は不詳だが、境内に奉納されている灯笼に文化元年（一八〇四）の銘がある。また天保四年（一八三三）の棟札を存する〔徳島県神社庁教化委員会 一九八一 六八〇六九〕。

◎地神塔

神社と道路を挟んだ角地（鳥居の向かい）に、三神塔、光明真言塔とともに立つ。地神塔と三神塔は、共通の前円後方型の砂岩製の台座の上に立てられている。心石は砂岩製、五角柱型。台石は二段からなり、いずれも方形。銘文は以下の通り（時計回り→右回りに見た場合の配置。「天照大神」が北面するように立てられている）。紀年銘は入っていない。

壇安媛命
倉稲魂命

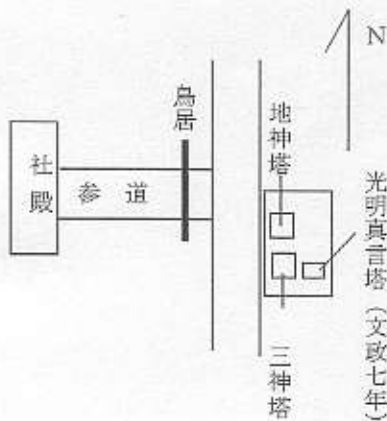


図7 八坂神社境内概略図

◎三神塔

天照大神
大己貴命
少彦名命

地神塔の南隣に、地神塔の正面（天照大神）と向かい合う形で立つ。砂岩製、角柱型。台石は二段で、いずれも方形。銘文は以下の通り。銘文の筆致や台石の形態などからみて、地神塔とほぼ同時期に作られたものと推察される。

（正面）

鏡 句々酒馳命

瓊 大山祇命

劔 水象命

（裏面）

寛政十年

戊午冬立之



写真5 八坂神社の三神塔（手前）と地神塔（奥）

〔事例七〕水神社（板野郡北島町綱の浜字西の須）

◎水神社の概略

祭神は水波能女命・大綿積命・素盞鳴命・稻荷大神・事代主命・菅原道真公を相殿神として祀る（いずれも大正期に近在の神社を合併して奉斎したもの）。旧村社。創建年代は不詳であるが、古くからの社とされ、明治八年（一八七五）に村社に列せられる「徳島県神社庁教化委員会 一九八一 二六二〜二六三」。

◎地神塔

水神社参道東側に三神塔と向かい合うように立つ。現在の地神塔は平成一二年（二〇〇〇）に再建（改築）されたものである。心石は御影石製、五角柱型。周囲に御影石製の石垣（外陣・内陣の別あり）が設けられている。銘文は以下の通り（時計回り⇒右回りに見た場合の配置。「天照大神」が北面するように立てられている）。

- 壇安媛命
- 倉稻魂命
- 天照大神
- 大己貴命
- 少彦名命

◎地神塔（再建前）

平成一二年の再建以前も、地神塔は現在地に三神塔と向かい合うように

立てられていた。当時の心石は砂岩製・五角柱型で、台石（砂岩製）は円形（上段）、方形（下段）の二段からなり、積み石の台座の上に立てられていた。周囲には石垣が設けられていた。銘文とその配列は現在のものと同様。紀年名は入っていないかった。

◎三神塔

地神塔の正面に、南向き（地神塔に面する形）に立てられている。平成一二年に地神塔を再建した際に三神塔もあらためて再建した。花崗岩製の石碑で、銘文は以下の通り。

- （正面）
- 大山祇神社
- （裏面）
- 句々迺智神
- 大山祇神
- 罔象女神



写真6 水神社境内の三神塔（再建後）

◎三神塔（再建前）

平成一二年に再建する前の三神塔は、現在と同様、地神塔の正面に南向き（地神塔に面する形）に立てられていた。

以前の三神塔は地神塔と同様に砂岩製・五角柱型で、円形（上段）・方形（下段）の二段の台石を有し、積み石の台座の上に立てられていた。五角柱の五面のうち三面（地神塔に面した面）に三神の名を刻み、残り二面は空白（無銘）であった。石塔の形態、銘文の筆致などから、地神塔と三神塔はほぼ同時期に立てられたものと推察される。銘文は以下の通り。

(正面)

鏡 句 句 廻 馳 命
瓊 大 山 祇 命
劍 水 象 女 命

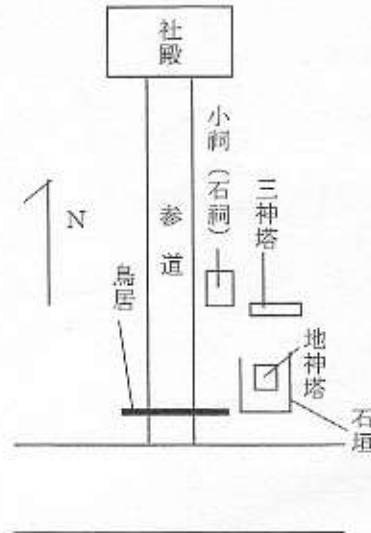


図 8 水神社境内概略図

写真 7 水神社境内の三神塔 (再建前)
(岡島隆夫氏提供)

三 検討

筆者は現在まで、徳島県内において前記七基の三神塔を見いだしたが、そのいずれも、地神塔との関連性が強く感じ取れるものであった。

第一に、地神塔と三神塔は事例一の天神社のケースを除き、いずれも隣接して立てられている。事例一においては過去、社地整理のため石塔の移動がなされており、かつては両者が隣接して立てられていたとも考えられる。

第二に、位置が隣接しているのみならず、共通の台座を持つ(事例二、三、四、六)、共通の石垣を持つ(事例五)など、より両者の一体性を感じさせる構造が見て取れる。

第三に、心石の形態が類似する(事例七)、台石の形態が類似する(事例六)、銘文の筆致が類似する(事例三、六)などの点からも、地神塔と三神塔がほぼ同時期に立てられたことが推察される。

第四に、いずれの三神塔にも紀年銘が入っている(事例七を除く)のに対し、地神塔にはまったく紀年銘が入っていない。近隣地域の地神塔を見ると、紀年銘が入っているものも多い。おそらく地神塔と三神塔をセットで造立した上で三神塔に(代表して)紀年銘を刻んだため、地神塔の方には紀年銘を入れなかったものと思われる。

天神社の事例(事例一)は、このような解釈を裏付ける事例と考えられる。同神社境内の三神塔には「有官命而村中造立焉」の文字が陰刻されているが、この銘文の持つ意味は大きい。本稿の最初で触れたように、徳島県内の地神塔は、寛政元年(一七八九)、富田八幡宮の祀官・早雲古宝が藩主蜂須賀治昭に進言し、各村に地神塔を立てさせ庄屋に祀らせたのが始まりと言われている。「官命」によって造立が命じられたのは地神塔であって、三神塔ではない。このことから、地神塔と三神塔を同時に造立して、三神塔の方に(「地神塔を」官命によって造立したとの意味で)「官命」と刻んだものと考えられるのである。

三神塔に「寛政八辰年 春三月吉日」の紀年銘が入っていることと考え

あわせると、おそらくは春の社日（春分または秋分にもっとも近い^{つちのま}）の
日。地神塔の祭祀日とされる）に地神塔と三神塔をあわせて造立し、三神
塔の方に紀年銘を刻んだものと推察される。寛政元年に地神塔造立の官命
がおりて七年目のことである。天神社は藩主・蜂須賀家の崇敬が篤い神社
であったことと考えあわせると、あえて「官命」と刻んだことの意図が感
じとれる。

第五に、三神塔の紀年銘をみると、事例六（寛政十年戊午冬）、事例七
（紀年銘なし）を除き、春三月または秋九月に立てられている。地神塔の
祭祀は春秋の社日に行われるならわしとなつてはいるが、このことは徳島の
地神塔造立・祭祀の規範となつたとされる大江匡弼『神仙靈章春秋社日醮
儀』（天明元年「二七八一」序文）の中に明記されている³。つまり、地
神塔の祭祀日＝社日にあわせて地神塔と三神塔を立て、三神塔の方に銘文
を刻んだものと推察されるのである。

このように、地神塔と三神塔の位置関係、石塔の形態、銘文などの状況
をふまえると、三神塔は地神塔とセットで造立されたものと考えられる。

それでは、なぜ三神塔は地神塔とセットで造立されなければならなかつ
たのか。『神仙靈章春秋社日醮儀』には、地神塔とセットで三神塔を立て
るべしとの記述はまったくなく、これはまったくのローカルな解釈と考え
られる。

地神塔に刻まれるのは農業五神（天照大神、大己貴命、少彦名命、倉稻
魂命、埴安媛命）の名であるが、これは『神仙靈章春秋社日醮儀』の指示
に基づいたものであり、農業の神を祀ることによって五穀豊稔を祈念した
ものである。一方、三神塔に刻まれた三神の性格を見ると、大山祇命＝山
神、句句迺馳命＝木神、罔象女命＝水神というように、いずれも自然界を
象徴した神で、作物の生育に大きく関係した神とすることができると考

要するに、地神塔に祀られた農業五神に加え、作物の生育に密接に関連
した山神・木神・水神の三神をあわせ祀る³ことによつて、自然環境の
安寧と作物の順調な生育を切に祈念したものと考えられるのである。

地神塔造立に際してこうした心意（自然を統率する多くの神々を祀るこ
とによつて農業生活の安定を願う）が発現することは、麻植郡美郷村にあ
る七角形の地神塔、那賀郡那賀川町にある八角形の地神塔（いずれも県下
では当地にしか見られない変則的な形態である）の銘文からもうかがい知
ることができる。

美郷村の七角柱の地神塔には、通常の農業五神のほかに水速女神（水神）
と級長戸辺神（風神）の名が刻まれているが、日照りや暴風による作物
への被害を防ぐために、このように変則的な形態の地神塔が造立されたも
のと考えられている。「神山町成人大学編集部 一九九一 八」。那賀川町
小延および敷地の地神塔は八角柱で、通常の農業五神に加え、山神・木神
・水神の三神の名前が刻まれている。「那賀川町史編さん委員会 二〇〇二
九四一」。ここでは奇しくも三神塔に見られる三神と同一の神が農業五
神に加えられているわけであるが、那賀川町の八角柱の地神塔と、三神塔
の間に直接的な関係があるかどうかについては慎重に検討する必要がある
う。

最後に問題になるのが、県内における三神塔の分布状況、および造立時
期である。三神塔の分布は、管見の及ぶ限り、吉野川最下流域の狭い範囲
に集中している。また、年代的に見ると一八世紀末から一九世紀前半（一
七九六～一八四三年）に集中しており、それ以降の造立は見られない。今
後の調査の結果、より広い地域に三神塔の分布が確認され、造塔期間の幅
が広がる可能性もあるが、現時点で把握した限りの資料では、地神塔にあ
わせて三神塔を造立するという習慣は、一八世紀末から一九世紀前半の約

五〇年の間に、きわめて限定された地域に展開した習俗であると考えられる。

紀年銘から見て、最初に立てられた三神塔は事例一の天神社（徳島市北田宮四丁目）境内のものである。銘文には寛政八年（一七九六）とある。先述したように、天神社の三神塔には「有官命而村中造立焉」と刻まれており、この年に地神塔と三神塔がセットで造立されたと見られる。地神塔は官命によって造塔が指示されたもので、それに従い天神社境内にも造立が行われたが、この際、当地の知識人（三種の神器や三神に関する知識を持っていることからして、神官ではないかと思われる）により、三神塔をあわせて祀ることが提唱されたのではないだろうか。

以後、近隣の神社でもこれに倣って三神塔と地神塔の造立が行われたものと考えられるが、地神塔の造立は官命によって奨励されたのに対し、三神塔の方はそのような指示がなかったため、また造立の手間などの問題もあり、広く普及するに及ばなかったのではないか。

以上、三神塔は地神塔と密接な関係を持つこと、三神塔は地神塔の機能を補強するものとして造立されたと考えられること、三神塔の展開は限られた時代、狭い範囲にとどまったことを指摘した。今後は文書史料の調査や、さらなる石造物調査を進める中から、本稿の論旨を補強するデータを収集したいと考えている。

注

(1) 以下の拙稿を参照されたい。

高橋晋一 二〇〇〇 「地神信仰に見る均質性と多様性―徳島県那賀郡那賀川町の事例より」 『日本の石仏』九六 日本石仏協会 一四

二七

(2) 山神、木神、水神を祀る石碑・石塔が単独で立てられているケースは少なくない（特に山神と水神）が、三神をあわせて祀る石碑・石塔は珍しい。

(3) 同書は農業の守護神である地神の重要性を説き、その祀り方を示した書で、農業五神の名称、五角の石柱に五神の名を刻むこと、天照大神を北向きに祀ること、石柱の立て方、祭祀の方法などについて具体的な説明がなされている（大江 一九八七）。

(4) 三神塔の中央には必ず「大山祇神」（山神）が刻まれている。三神のうち特に大山祇神を主尊とする考え方があったかどうかについては、現存する資料からははっきりしない。

参考文献

- 飯田義資 一九六五 「地神碑と社日祭」 『近畿民俗』三六 近畿民俗学会 二一〜二三
- 大江匡弼 一九八七 「神仙靈章春秋社日醮儀」 『神道大系 論説編一 六 陰陽道』 神道大系編集会 三五九〜四〇三
- 金沢治 一九七四 『日本の民俗 徳島』 第一法規
- 神山町成人大学編集部編 一九九一 『神山の地神さん』 神山町教育委員会 社会教育課

(千七七〇―八五〇二 徳島市南常三島町一― 徳島大学総合科学部)